

世界遺産へ最大の好機

推薦書案6度目提出

佐渡島の金山

県と佐渡市は1日、世界文化遺産の2021年度の国内推薦候補選定を目指す佐渡金山の推薦書原案を、31日に文化庁へ郵送で提出したと発表した。提出は6度目で、前回提出した推薦書「佐渡島の金山」と、構成資産や対象時期などの大幅な変更は行わなかった。例年7月に開かれる国の文化審議会で選定されれば、23年の世界文化遺産登録が見込まれる。

県と佐渡市は20年3月に原案を提出したものの、新型コロナウイルスの影響で、選定作業の前提となる国連教育科学文化機関（ユネスコ）の会合が延期されたことから、文化審議会による国内推薦候補の選定が行われなかった。本年度は国内推薦の「最有力候補」と目されている。

前回の審議が行われた18年度には、他の鉱山資産とは価値が異なる部分を、分かりやすく説明することなどを求められていた。20年度の原案では、戦国時代末から明治時代前半としてきた対象時期を江戸時代まで

とし、三つあった構成資産を「相川鶴子金山」と「西三川砂金山」の二つに集約するなどの変更を行った。加えて、江戸幕府に

た。

よって長期的に継続した手工業による生産体制が、同時代の欧州の鉱山と異なる特徴だとして強調する表現とした。

渡辺竜五・佐渡市長は「登録を目指して確実に取り組みを進めていく」とコメントした。

国内推薦は例年7月ごろに文化審議会で候補を決定する。文化庁によると、31日までに佐渡を含む3件を受理した。「飛鳥・藤原の宮都とその関連資産群」（奈良県）と「彦根城」（滋賀県）が推薦書原案の提出を予定していた。